



東京スカイツリーの開業を目前にして墨田区は全国から訪れる観光客で賑わっていますが、江戸の頃から墨田区は賑わいの街でした。江戸を代表する観光スポットとして、江戸っ子はもちろん江戸を訪れる内外の観光客が訪れました。このシリーズでは墨田区を四地域に分け、各地域の魅力を江戸時代に遡り紙上散歩しながらご紹介します。初回は両国地域です。

両国と言うと、両国駅近くにある両国技館と江戸東京博物館が江戸を感じさせる観光名所ですが、江戸の頃は隅田川に架かる両国橋広小路と、鼠小僧のお墓があることで知られる回向院が江戸有数の観光名所でした。両国駅を降りて、京葉道路（国道14号線）に向かって歩きます。京葉道路を西に進むと、やがて橋が見えてきます。万治2年（1659）に架橋された両国橋です（万治4年（1661）説もあります）。架橋のきっかけは、明暦3年（1657）正月に起きた明暦の大火でした。この大火は江戸城をはじめとして江戸の街を燃やし尽くし、焼死者だけで10万人に及びました。隅田川に橋が架けられていなかったため、隅田川河畔で逃げ場を失い、溺死した者も数知れずいたそうです。この大惨事を教訓として、幕府は両国橋を架けます。

現在の両国橋は、江戸の頃に架けられていた場所よりも50mほど上流にあたります。両国橋のもとに広がる広小路には、飲食店をはじめとする店が立ち並んでいました。意外にも、橋のたもとが江戸の盛り場として賑わっていたのです。それだけ、両国橋を通行する人の数は多かったのです。両国橋広小路の近くに鎮座していたのが回向院です。回向院も、明暦の大火との深い縁があります。大火の犠牲者を慰霊するため、幕府はこの地で追善法要を執行し、無縁の犠牲者の霊を供養するための石塔が建立されます。ここに、回向院の歴史がはじまります。境内には著名人のお墓が随所にあります。江戸っ子にとって最も身近な存在だったのは、鼠小僧だったかもしれません。現在でも、ご利益を求め参詣する人が絶えません。

回向院は両国橋広小路にも近いので、境内は相撲の興行場所としても賑わいました。相撲の街両国は、まさに江戸時代にはじまるわけです。両国技館近くには、江戸の面影が残っている場所があります。両国駅から国技館通りを北に歩いていくと、墨田区が管理する旧安田庭園が見えてきます。この庭園の広さは14,250平方メートルもありますが、元々は江戸の大名庭園でした。

この本庄家の庭園は明治に入ると、安田財閥の創始者安田善次郎が入手します。安田の死後、東京市に寄付されたことで、旧安田庭園と言う名称になります。昭和42年（1967）に旧安田庭園は墨田区に移管され、46年（1971）に在りし日の姿が復元されたのです。

（歴史家 安藤 優一郎）

本所を歩く(その1) -両国周辺を中心に-

旧安田庭園は5代将軍徳川綱吉の母桂昌院ゆかりの庭園です。桂昌院の実家本庄家は桂昌院との縁により大名に取り立てられ

ました。その際、この地に屋敷を与えられます。本庄家では邸内に庭園を造成しましたが、庭園となれば池は欠かせません。隅田川縁という地の利を活かし、庭園内に造った池に隅田川の水を引き込みましたが、隅田川の水位は潮の干満により上下します。ですから、庭園内の池の水位も時間により変わりました。こうした庭園は潮入庭園と呼ばれましたが、園内にはその取水口も残されています。



旧安田庭園